

空色ネイル

内池 陽奈

日課の天体観測を終えた夜遅く。家に帰ると、玄関にあるいつもの兄の靴の隣に、見慣れない革靴が鎮座していた。

兄の友達のものだろうか。父も母もないこの家で、葵の知らない物があればその出どころは唯一の兄の祐介である。

それにしても不思議だ。祐介と二人暮らしを始めて数年、祐介がこの家に誰かを連れ込んだことなど無かったからだ。

葵は首を傾げながら学校指定のローファーを脱ぎ去り、家上がった。途端にツンと刺さる煙草の匂いが葵の鼻を襲う。

あのアホ兄貴、また部屋で吸いやがった！

葵は玄関の見慣れない靴のことを一瞬で忘れて、苛立ちを足音に込めて廊下をダンダンと突き進んだ。リビングのドアを開けて祐介を叱り付けようとした瞬間、見知らぬ男がソファに座っているのに気が付く。二人で呑んでいたのだろう、テーブルの上には酒の缶とおつまみの類が散乱している。

「おう、おかえり」

眼下には、白い煙を燦らせながら床で胡坐をかいてくつろぐ祐介。じろりと睨むと、首をすくめて煙草を灰皿に押し付けた。

「お邪魔しています」

見知らぬ男が葵に向かって深々と頭を下げた。男は全身真っ黒な服で、長髪を後ろで簡単に結んでいた。まだ暑い時期にもかかわらず、長袖のTシャツに身を包んでいる。頭を下げたタイミングで、首の右側に蟹のタトゥーがちらりと見えた。

葵の困惑を感じ取ったのだろう、祐介が男を指し示してこう言った。

「この人は大学の先輩のジンさん。今は卒業して、ネイルリストをしてるんだ」

「ネイルリスト…」

ジンさんと呼ばれた男の指をちらりと見ると、シンプルに装飾された爪が目に入った。なるほど。

「そうだ」

ジンさんが葵に向き直る。

「葵ちゃん。一宿一飯のお礼として、ネイルさせてくれないかな」

「…良いけど」

気まぐれに了承すると、ジンさんは嬉しそうに頷いてテーブルの上を片づけ始めた。テーブルを挟んでジンさんに向かい合うように座る。

巨大なトランクケースから次々と道具を出しながらジンさんは葵に聞いてきた。

「どんなのが良い？」

なんでもいい。

少し考えて、答える。

「空の色」

ジンさんは微笑んで、私の手を取った。

◆◆

「葵」

祐介に肩を揺すられている。

「やばいぞ、学校遅刻じゃねえの」

「…え」

寝ぼけ眼をこする。

「嘘、私寝ちやつてた？」

壁掛け時計を見て飛び起きる。爪を塗ってもらうために手を前に突き出して預けた体勢のまま寝落ちたせい、肩が痛い。

慌てて支度を始める。ジンさんはどうやらもう家を出たようだった。

霞のような人だったな。

口元に薄く笑みを浮かべていたこと以外、もうはつきりと覚えていない。

大きなトランクを抱えていたが、いったいどこへ行ったのだろうか。

…そうだ、爪。

パッと両手を猫の手にして確認すると、爪は白藍色に染まっていた。

葵はフツ、と鼻で笑った。

安直ね。空の色とオーダーされて薄い水色を塗るなんて。

別に何色が良かったとか無いけど、と独り言を呟いて葵は家を後にした。

◆◆

「武内イ！」

しまった、二限は佐々木先生の数学だった。三限に遅れて行けばよかった。

時すでに遅し。亀のように首をすくめて教室に入る。クラスメイトの同情するような、面白いような視線が痛かった。

「なんだお前、遅刻してきたうえにそんな派手な爪してきて！」

「すみませ〜ん…」

平謝りしながら逃げるように自席に座る。

「担任の先生に報告しておくからな！」

「はい」

葵の生返事に佐々木は不服そうな顔をしたが、それ以上は追及することなく授業を再開した。緊張した空気は次第に普段通りになっていく。

派手な爪、って。

葵は溜息をついた。

白に近い水色の、何が派手なのだろうか。

そう思いながら机にかけた鞆から教科書を取り出して、葵は目を丸くした。参考書を取り出した手の先には、朝見たときよりもずっと濃い、群青色の爪がついていた。

困惑しながら爪を見る。時間経過で色が落ち着いて濃くなったとか？いやいやそんな聞いたことない。

その日は一日、葵は啞然として己の真っ青な爪を見つめたまま過ごした。

◆◆

「武内さん」

ホームルームの後。クラスメイトがそれぞれ部活や帰路へ向かう中、担任の佐野が呼び止めてきた。

「あ」

そうだった。すっかり忘れていた。

葵は担任の元に駆け寄り、頭を下げた。

「遅刻してすみません」

「いいのよ、たまには遅刻くらい」

にこりと微笑む佐野の顔を見て、葵はホッと息をつく。

「それより、今日も大野さんのお見舞いに行くんでしょう？プリント頼んでいいかしら」

「はい、もちろん」

「ありがとう。…あらやだ、職員室に忘れてきちゃったわ。一緒に取りに来てくれる？」

葵は頷いて佐野の後ろを歩く。渡り廊下の窓からギャー、と声が聞こえて二人揃ってグラウンドの方を見た。どうやら急な豪雨で部活組が大騒ぎしながら撤退しているらしい。

「急に降ってきたわね。さっきまで雲一つないお天気だったのに」

佐野が眉をひそめて窓の外を見ながら歩く。ほどなくして職員室に着いた。

「はいこれ」

プリントの束を受け取る。

「…そういえば、佐々木先生が武内さんの爪が派手だとかなんだとか言ってたけど」

佐野は少し困ったような笑顔で言葉を選ぶ。

「最近はその…変わった色が流行っているのね」

視線を下に落とす。プリントを握っている手には、鈍色の爪。

バツと手を押さえながらプリントを小脇に抱えて逃げるように職員室を出た。

「なにこれ、なにこれ、なにこれ！」

渡り廊下の窓が雨に叩きつけられてバチバチと立てる音が嫌にうるさかった。

最悪、なんでこんなネズミみたいな色になってんの！

爪を立ててゴシゴシとこするが、頑丈なジェルネイルは傷一つ付かない。外では雷がゴロゴロと鳴っている。

あーもう。ジェルネイルってどうやって落とすんだろう。

葵は肩を落として下駄箱へ向かった。

◆◆

無機質で消毒液の独特な匂いのする廊下を迷いなく進む。白い壁に「大野マリ」と書かれたプレートがかかった部屋のドアをノックして、ガラガラと横に引く。

案の定、ベッドの上にマリはいた。

「葵」

「調子どう？」

「まあまあかな」

学生靴からプリントの束を取り出し、マリに手渡す。

「わざわざありがとうね」

「別に。マリに会う口実だから」

ベッドの脇の丸椅子に座る。

「天文部のみんなは元気？」

「…あー、引退してから全然話してない」

「そっか」

マリがベッドサイドの棚に目を向ける。そこには入部当初に行った合宿で撮った写真。部員たちの右端に葵とマリが肩を組んで写っている。

「そうやって疎遠になっていくのかもね」

しんみりとマリが呟いた。

「…葵がオーストラリアに行っちゃう前に、もう一度一緒に星を見に行きたかったな」

「見に行けばいいじゃない。まだ卒業まで時間あるよ」

「…」

マリは下を向いた。

「…入院、長引くことになったの」

「え」

「もう葵と星が見れることなんてないのかも」

そう言ってクシャッと笑ったマリの目は潤んでいた。

なんて声をかければいいのかわからず、葵は黙ってしまった。

◆◆

夕陽に照らされながら、帰り道の土手を歩く。

さっきまでのゲリラ豪雨は嘘のようになり、空から零れ落ちそうな夕陽が辺りを真っ赤に染め上げていた。

学生靴を握った手を何気なく見て葵はハッとすする。その手に付いた爪は見事な茜色に光っていた。もしかして。

昨日ジンさんに言った言葉を思い出す。

「空の色」とオーダーした爪。朝は薄い水色で、昼は濃い青に、雨が降ったらネズミ色に変わった。そして今は…夕陽色。

興奮で呼吸が浅くなっていくのがわかる。心臓の音が頭に鳴り響く。

葵は病院に向かって走り出した。

◆◆

病院に着いた頃にはとくに陽が落ちていて、闇が葵にまとわりついていた。

面会時間は過ぎている。解放されている病院の庭に入った葵は、マリの病室の下を目指して突き進んだ。

葵はベンボーチから修正ペンを取り出し、己の漆黒の爪に無数の点を描く。

爪が乾く暇もなく、葵はスマホを取り出し電話をかけた。

ワンコール。ツーコール。スリーコール。

「もしもし」

マリの高い声。

「マリ！マリ！外見て！」

「え？」

「いいから！」

しばらくして、五階の病室のベランダにマリの姿が見えた。

「空見て！」

上を向くマリ。口元に手を当てたのが暗闇の中で見えた。

空には、葵たちの町ではあり得ないほどに煌々と輝く星たちがマリの顔を照らしていた。

「また一緒に星見れたね」

「…うん」

少し湿っぽいマリの声。

「私、いつまでも待つからさ」

泣きそうになるのをこらえて言葉を探す。

「元気になって退院したら、一緒に世界の星を見に行こう」

「うん、うん…！」

大きく頷くマリ。その表情はすっきりと希望に溢れている。

それから二人は電話を繋ぎながら語り合った。今見ている星空のこと、過去に見た星空のこと、これから見に行きたい星空のこと。

星は輝きを失わずに、話し込む二人をずっと照らし続けていた。

「それにしても」

空を見上げながらマリが首を傾げる。

「なんで西の空にしか星が無いんだろうね？」

右手で描いたからだよ、とは言えなかった。